

・【トレセンダー屋敷（のように見える隠れ家）にて】

「い・や・ですっ」

ここ最近で一番の大声でサラが叫んだ。叫んだ先はテーブルの上の水晶玉、の向こうにいるエリィトレセンダー（姉）。

「へっ？」

まさか断られるとは思っていなかったのか、何とも間抜けな声でエリが聞き返した。その後、水晶玉の向こうのエリは、少し場所を移動して、今よりも周囲に木々の葉が生い茂り、

声が反響しづらい場所を選ぶと、少し小声で、そしてあくまで優しく、諭すように先ほどもう一度同じことを説明する。

「サラちゃん、以前にもお話したと思うんですが、アーティファクトを何とか持ち帰ったわけですから、すぐにみんなで波音の洞窟に向かって欲しいんです。申し訳ないんですが、諸々の準備に時間を取っている余裕はないんです」

その言葉は優しいが端々に反論を認めないオーラが感じられる。そのエリの言葉に言いくるめられないよう、サラは大きく息を吸い込んで、その息を一気に吐き出す勢いで一気にまくし立てた。

「でも、このままだとリヴィヴィファイが使えないので前のようなことがあったときに司祭様の包みがもうないから困っ

たことになってしまつて大変になるのでどうしてもダイヤモンドを探さないといけなくて、だから、すぐに行くことはできなくてダメなんですっ」

言葉を紡ぎながら、サラの脳裏にはあの時の、ドラゴンの炎に包まれるドランメイの様子がフラッシュバックしていた。あんなのはもう嫌だ。その思いが言葉に、そして水晶玉とぶつかりそうな距離に表れ出た。

実のところ、この部屋にはサラ以外のメンバーも全員いるわけだが、水晶玉にかぶりつくように身を乗り出しているサラに圧倒されてか他のメンバーは少し引いた感じで椅子に座っていた。

「よし、サラちゃん、ちょいと落ち着こう」

水晶玉に向かって身を乗り出していたサラをエミ・トレセンダー（妹）が後ろからやさしく抱きしめて座らせた。

そして、サラの顔と自分の顔がちょうど並ぶように、サラの肩口から顔を出して、それからサラの方に向いて、エリにも聞こえるようにサラの言葉を確認し始めた。

「ええっと、整理すると、ダイヤモンドがないとリヴィヴィファイという呪文が使えない。これは合ってる？」

エミの顔の隣で黙って頷くサラ。

「では、司祭様の包み・・・はちよつと置いていて、リヴィヴィファイの呪文というのはそもそもなんでしょ？」

「エミちゃん、リヴィヴィファイは蘇生魔法よ」

答えたのはサラではなく水晶玉の向こうのエリ。

「へ？蘇生魔法はレイズデッドでしょ？」

エミがサラの方から水晶玉の方に顔を向き直して不思議な顔をして聞き返す。

「レイズデッドは確かに高位司祭が使う蘇生魔法だけど、あれは十日以内の死者に使えるもので、サラちゃんの言ってるリヴィヴィファイはその簡易版、一分以内の死者にしか使えないものなの。だからその発動条件から言って神殿にいる司祭が使うことを見ることはまずないわ。冒険者専用魔法と言ってもいいと思う。で、エミちゃんがなんで知らないのかが私にはわからないんだけど」

言われたエミはバツが悪そうに水晶玉から視線を逸らした。

「も、もちろん知ってますって。あれですよ、アレ。状況を整理するために敢えて知っていることも聞いてみるっていうね。で、話を戻すと、つまり最終決戦に向けて蘇生魔法を準備してから洞窟に合流したいと」

サラが再び黙って頷く。

それを見たエミの顔がバツと明るくなった。そして抱きついていたサラを離れ元気よく立ち上がると、得意げに

「なるほどね、触媒のダイヤモンドなら私のを貸してあげれば万事解決じゃないですか」

と言いながら、ごそごそとポーチを探り、小さなダイヤモンドを取り出して大げさに掲げて見せた。

「私の触媒は後で買い直せばいいので、これをサラちゃんに渡しておくね。これで大丈夫？」

とサラに聞く。が、予想に反して、サラは少し困ったような顔をして目の前に出されたダイヤモンドを見た。

エミがサラの答えを待っていると、予想に反して水晶玉の向こうから

「あー、エミちゃん、エミちゃん、多分それだめだと思う」とエリの声がした。

「お姉ちゃん、そこからじゃ私のダイヤモンドは見えないでしょ？」

「見えないけどエミちゃんが何を出したかはわかるわ。クロマティックオーブに使うやつでしょう？」

「さすがお姉ちゃん、お目が高い」

「はあ」

水晶玉の向こうからため息が聞こえた

「エミちゃん、サラちゃんが答えないのはね、それが本当に触媒として十分な大きさのダイヤかどうかからないからだと思うわ。で、リヴィヴィファイの触媒はその五倍以上の値段がするダイヤが必要なのよ」

「へっ、5倍？」

「5倍以上ね。原価ベースでおおよそ金貨300枚くらい。しかもオーブの呪文と違って一度使うと無くなるタイプ」

「300枚？」

エミはびっくりしてサラを見た。

見られたサラはというと、ダイヤの価値についてどう答えていいかわからないので不安そうにエミを見返すしかなかった。「いや、300枚って私らの魔法でもそんな触媒使うの見たことないんですけど」

エミはこれ見よがしに掲げた手が恥ずかしくなって、小さなダイヤモンドをそっとポーチの中に戻した。

「私がサラちゃんの使うクレリックの魔法について本職を差し置いて解説するのは気が引けるんだけど」

と前置きしながらエリは諭すように言葉を続けた。

「リヴィヴィファイの魔法は実のところ使う人があまりいないの。なぜかというと前提条件の一分があまりに短すぎるか

ら。クレリックは朝の祈りでその日に使う呪文を選択する、これは私たちとほとんど同じよね？」

サラは小さく頷く。実はエリには見えていないのだが。

「その時点でその呪文を『準備する』ということは、その日誰かが死ぬと予言するということとほぼ同義になるの。もう少しわかりやすく言うとな、もしその準備をせずに誰かの死に直面した場合、呪文を覚え直す前に一分が過ぎて手遅れになってしまうし、その一方で、その準備をした状態で誰も死ななかった場合は貴重な準備枠を一つ無駄に使うってしまうの。だからわざわざ高価な触媒を準備してまでその呪文を用意するということはほとんどの冒険者は選択しないの。どう？ここまでわかるかしら」

ゆっくりと丁寧ではあるが、触媒を準備しない方の結論に誘導するために、やんわりとリヴィヴィファイの難点を説明する。

が、サラの返事はエリの予想の遙か斜め上を突き抜けるものだった。

「わかりませんっ。だって、私は、ミシャカル様はリヴィヴィファイの魔法を準備しなくても使えるんです。選ばなくてもいいんです。だから、ダイヤモンドさえ用意できれば大丈夫なんです。私はミシャカル様の名にかけて、みんなが無事に戻らなきゃいけないんです」

サラは水晶玉に額をぶつけそうなくらい身を乗り出して向こうにいるはずのエリに向かって叫んだ。

「はい？」

水晶玉の向こうでエリの目が点になった。

・【とある洞窟の近くの森にて】

エリは予想外のサラの反論に対して、水晶玉に目を向けつつも自分の中の思考に没頭していた。

（あの子はいったい何を言い出したのだろう。呪文が準備しなくても使えるとは。いやいや、あのレベルの呪文が準備なしに使えるとかそんな話は聞いたこと・・・）

『ない』と続けようとして、ふと昔の知り合いのクレリックの言葉を思い出した。

『我々は神の代行者なれば、神を象徴する魔法はいついかなる時でも行使可能なですよ』

（そういえば、確か信仰している神に応じて必ず使える呪文があるとか。リヴィヴィファイがそれにあたるなんて初耳だけど、生命領域のまともなクレリックを見るのが初めてなのだから、そういうこともあるかもしれない。まさかこの期に及んであの子が嘘言ってるとも思えないしね。それにしても、常時準備可能なリヴィヴィファイってかなり反則な気が。触媒はアレだけど）

「・・・ちゃん」

遠くで声が聞こえた気がした。

「お姉ちゃん、おい、聞こえてるー？」

エミの声だ。水晶玉の向こうから聞こえる。反応が無くなつたこちらを心配しているようだ。

「大丈夫よー」

とりあえず返事を返して自分の思考を再開する。

（しかし参った。あの子が神の名にかけた以上、私はあの子が寄り道するのを邪魔するわけにはいかない。計画は修正せざるを得ないが、さて・・・）

周囲を見渡す。森と言っても木々がまばらであまり隠れると

ころがない。

魔法が論外である以上、自力でどうにかするしかないので、水晶玉を手に取り、少し場所を移動してみる。

少し歩いたところで、幸いにも大きめの木が見つかったので、上に登ってみた。木の上なので窮屈なのは仕方ないが、一人ならなんとか座って身を隠せそうだ。

触媒入れじゃない方のウエストポーチをさぐる。食事はある。久しくこの手の保存食は食べていなかったが、まあ五日くらいならダイエットにもなりそうだ。水源は事前に探してある。毎度上り下りしないといけないのが難儀ではあるが。

（あとはダイヤモンドか。ネバーウィンターの街に金貨300枚相当のダイヤモンドは基本的に売っていない。冒険者その日偶然持ち込んだとかそういうご都合主義に期待するなら別だが。なので売っていないダイヤモンドを探す必要がある・・・んだけど、あー、あいつしか頭に浮かばないや）
あまり気乗りのしない奴の顔を思い浮かべたもんだから木からズリ落ちそうになるが、すんでところで堪えてみせた。

（しかたない、生き残ることが先決だとエミにも散々言ったんだから、借りを返す機会が来るのならば、それを幸いと思うべきだ）

腹は決まった。成功率は下がるが、まだ修正できる。

「お姉ちゃん、もうっ、考え事始めると周りのことガン無視するの悪い癖だよー」

水晶玉の向こうにいるエミから非難の声が聞こえる。そろそろ真面目に応答しないと後でご機嫌を取るのが大変そうだ。

「ええ、エミちゃん、皆さんごめんなさいね。ちょっと状況を整理していたもので」

そして、いつもの調子で水晶玉の向こうに語りかけた。

・【再び隠れ家にて】

「わかりました。では三日だけ街で買い物をする時間を取りましょう」

エミはエリの予想外の返事に驚いていた。

本来姉は数手先を読みながら行動予定を立てる人なので、自分の予定が狂うことを好まない、というか絶対に許容しない。以前にもエミとこの手の話で意見が食い違うことはあったが、必ずエミが根負けするまでやんわりと『理詰めで説得』されるので、このあとの持久戦に備えて飲み物を準備してきたところだったのだが。

「ただし、約束してください。たとえ目的の物が入手できなくても、かならず三日後には波音の洞窟へ移動しはじめることを」

サラはここで初めてみんなの方を見た。
どう答えていいかわからなかったのだ。

『向こうが譲歩してうちに話を進めてしまえ』
とアドランが謎のジェスチャーで応答する。

シャオリンとバルサは顔を見合わせ、少し考えて、両手で大きく丸を描いた。

サラにとっては、丸が意味するところも謎のジェスチャーの意味もよくわからなかったが、とりあえず

「はい」

と努めて冷静に答えた。

「アルバートさん」

「はい」

「私の財布からプラチナ貨150枚とうちの割り符を出して、えーっと、バルサさんに渡してもらえますか？」

「かしこまりました」

いつもの口調で返事をする、まるで手品師のように胸のポケットから小さなポーチを二つ取り出してバルサに手渡した。

言われたバルサはなぜ自分が指名されたのかよくわからなかったが、アルバートからそのポーチを受け取り、中身を確認した。

一つ目のポーチには、普通には流通していない、バルサは知識としては知っている金貨の10倍の価値が認められているプラチナの硬貨、二つ目には精巧な細工が施された何製かよくわからない金属っぽい堅い材質でできた割り符が入っていた。

「サラちゃん、それと皆さん。リヴィヴィファイの魔法が使い勝手の悪い魔法であることは一般には間違っていないと思っています。そのことと、他にもいくつかの理由があって、ネ

バーウィンターの街で目的のダイヤを見つけることは至難の業ではないかと予想しています。もし、三日目になっても手がかりが無い場合は、ネバーウィンター上層区に住んでいるカセロール子爵を訪ねてみてください。私の名と割り符が・・・」珍しくエリの言葉を途中で遮ってエミが悲鳴のような声を上げた。

「お姉ちゃん?! あいつに借りなんて作ったら大変なことに」
「エミちゃん、分かっていますよね。今の私達には後で返せるものなら何でも使う覚悟が必要だと言うことを」

「だからって、よりにもよってあんな」

エミはそれだけは承服できないといった顔でエリに非難の言葉を向ける。しかしエリはいつも通りの冷静な口調で説明を

続けた。

「困ったことにその『あんな』が一番勝算があるんですよ。近々によほどんでもない損失を出したということがなければ、あそこには子爵婦人自慢の、金貨1000枚相当のダイヤをあしらった金貨1200枚相当の指輪があったはずです。渡した予算で収まるかどうかわかりませんが、それでも知っておくに超したことはないはずです。もちろん普通では会ってくれないでしょうが、私の名と割り符があれば話だけでも聞いてくれると思います」

「いや、うちの割り符なんて見せた日には屋敷の私兵に取り囲まれて、生きて出られるかどうかすら怪しいんですけど」
エミはやっぱり不満そうだ。

「エミちゃんはお勧めしないでしようが、とりあえず道の一つとしては示します。あとどうするかは皆さんにお任せします」

その話題をこれ以上深掘りしないように一行に丸投げすると、エリはひと呼吸おいてさらに続けた。

「アルバートさん」

声の調子を少し落として、冷静、というよりは感情を押し殺したような声で執事の名を呼んだ。

「はい」

「この後作戦終了までエミちゃんに常についていてください。あり得べからざることだとは思っています、が、もしもの場合はトレセンダー当主の名において我、が、家、の、切、り、札、の使用を許

可します」

「確かに承りました。ですがそうならぬよう最善は尽くしましょう」

バルサは執事の受け答えに一瞬違和感を覚えた。が、違和感の正体が分からなかったので今のところは聞き流すことにした。

「お姉ちゃん、切り札って相当ヤバいんじゃない？」

「『あり得べからざること』よ。当主の私の許可なしには使えないから、今のうちに許可を出しておいただけ。出し惜しみはなしでって言ったからね」

「すみません、その切り札というのはマジックアイテムか何

かですか？」

今まで沈黙を守っていたドランメイが謎の切り札が一人歩きしそうな状況を見かねて質問する。こういう言い方をしている以上、詳細な説明があるとも思えなかったが。

「ええ、私が先代の当主より受け継いでいるものがここにありまして」

と言ってアルバートは自分の胸ポケットのあたりを人差し指でトントンと叩いてみせた。

「門外不出の品ですので詳細はお話しできませんが、切り札の名に違わず、大概の状況はひっくり返せる代物です」

ドランメイはその説明に納得したわけではなかったが、これ以上言ったところで話が先へと進まないと思い、質問を切り

上げた。多分自分を復活させたレイズデッドの魔道具のようなものだろうと想像していた。

「んじゃ、主賓のお色直しが長いと向こうも退屈するでしょうから、ぼちぼちまた骨とダンスしてきますわ。泣いても笑ってもラストチャンスだからよい買い物」

と言ってエミは軽く柔軟体操をすると、みんなに軽く手を振った。

「割り符の使い方はお姉ちゃんに聞いてね。あと、カセロールは絶対信用しちゃだめよ」

「ただ信用がないのかカセロール子爵。」

「みんな、私が出てからすぐに出てこないようにね。鉢合わ

せすると台無しだから。アルバートさん、もうひと踏ん張り
よろしくお願いします」

「かしこまりました」

アルバートはいつも通り、いつもの調子でエミの後ろをついていく。二人が扉から外に出ると、隠れ家には一行だけが残された。

